

奉討候時、攝津國河内は亂れ、中にも攝津の國、一兩年亡所に罷成候と相聞え申候は、是は偏に佐渡守分別厚き故、今迄も打續き、殊に長岡の家、今程は大名に相成候事、臣下松井佐渡守故と相聞申候事。

〔常山紀談〕^五信長森丸[○]聞が明敏を試らる、事多かりけれど、一度もあやまちなく、其才老年の人も及ぶべきに非ず、明智が恨ある事を察し、潛に信長の前に出て、光秀飯をくひながら、深く思慮する體にて箸をとり落し、や、有て驚たり、是ほど思ひ入たる事、別の子細はよも候はじ、恨奉る事、[○]なれば、大事をたくむならん、刺殺すべしといひけるを、信長いやとよ、佐和山をば終に汝にあたふべしといはれけり、此は森これより先に、父が討死の跡にて候へば、坂本を賜れと申けるを、明智に與へられしかば、讒言すると思ひ信せられず、果して弑せられき。

〔常山紀談〕^五秀吉[○]羽備中に陣して、毛利と和平せん事を計り、密に手だてを運し、西國の米を價を貴く買れしかば、城米を出して賣る者多し、小早川隆景一人固く制してうらせず、信長弑せられて、秀吉と毛利家手ぎれなるべかりしに、兵糧のゆたかならざる故、終に和平に及べり。

〔豊薩軍記〕^六黒田勘解由孝高計策之事

黒田勘解由孝高は御目代として、御先に下ると云へども、必ず殿下[○]豊臣の御下向までは、戦はずして相待つべしとの仰なりければ、如何にもして敵を味方に引入んずる計略もがな有べきと思惟を凝しける。[○]中略 先一術をなし見んとて、武功の者を兩人撰み、殿下の威勢を云ひ聞せ、[○]殿下御下向を待て、速かに降禮あるべき由を云ひ含め、其趣を廻文にも書せらる、是は若慮の事ありて、此文落散る事ありとも敵を欺く謀にして、味方の煩ひにあらずとて、使者に是を渡さる、間、使は貝原市兵衛、久野勘助なり、貝原は小倉より海邊を経て、筑前肥前を過ぎ、肥後の國へ趣けば、久野は豊前より筑前に入り、秋月に到り、筑後を経て、又豊前の諸所を廻り、右の趣を云